



山崎豐子

不毛地帶

(三)

不毛地帯

(三)



新潮社

不毛地帯(三)

昭和五十三年八月十五日 印刷
昭和五十三年八月二十日 発行

定価 一〇〇〇円

著者 山崎 豊子

発行者 佐藤 亮一

発行所 株式会社 新潮社

〒一六二 東京都新宿区矢来町七一

電話(業務部)〇三二二六六(五)一一
(編集部)〇三二二六六(五)四一一

振替 東京 四一八〇八番

印刷 株式会社 金羊社

製本 新宿加藤製本

© 1978 Toyoko Yamazaki Printed in Japan.

乱丁・落丁本は、御面倒ですが本社通信係宛御送付下さい。送料本社負担にてお取替えいたします。

不毛地帯(三)・目次

一章	ニューヨーク……………	7
二章	試走……………	42
三章	炎……………	91
四章	曉暗……………	161

五章 インシヤ・アツラー…………… 218

六章 ナンバー・3…………… 259

七章 熱 砂…………… 305

裝
幀
司
修

不毛地帶
(三)

これは架空の物語である。過去、あるいは現在において、たまたま実在する人物、出来事と類似していても、それは偶然に過ぎない。

一章 ニューヨーク

壹岐^{いまだじ}正は、浮氷の流れるイーストリバー河畔のアパートで、二年目のニューヨークの正月を迎えていた。

鉛色の空が重く垂れこめ、木々の枝は、米松を除いて葉を落し、針金のように鋭く空に向って伸びている。戸外の温度は、華氏五、六度、日本流の摂氏でいえば、零下十六、七度ぐらいのようであった。

壹岐は、窓際^{まどぎわ}に一人たたずみ、浮氷の流れをじっと見詰めていた。マンハッタンの East 86th St. の高級住宅街にたつアパートの三十七階にある壹岐の部屋は、アメリカ近畿商事の社長としての立場上、ゲストルームを兼ねた三十畳ほどのリビングルームと十五畳ほどのダイニングルーム、そしてキッチン、バス、トイレに、プライベートな書斎と二つのベッドルームがあり、家具調度はすべてヨーロッパ調に整えられていたが、この広い豪華なアパートに住まうのは、壹岐一人であった。もし、アメリカ近畿商事の社長としての激務が壹岐になれば、どのような豪華な家具も、快適な暖房も、壹岐には何の関心も、意味もなかった。三

年前、自分の目の前で不慮の事故に遭った妻と死別し、娘と息子を残して来た壹岐には、現在の仕事がなければ、酷寒のシベリアの監獄生活と、それほど大きな違いはないはずであった。

星条旗をひらめかせた千トンほどの貨物船が、上流から次第に大きな船体を見せ、白い中洲の向うを通って、下流へ下りつつあった。流水が大きく左右に揺れ、雪の花のような氷の波が、凍てついた岸と中洲に打ち寄せ、砕け散った。

ペランダの真下から、船はゆっくりした速度で遠ざかって行った。壹岐は夢想だにしなかったニューヨーク住いをして自分の運命の変転に、今さらのように思いをめぐらせた——。大本営作戦参謀からシベリア抑留十一年、そして商社マンとしても十一年を経過した今、ニューヨークにあって、曾て軍力で闘った相手と、日々厳しい経済戦を繰り抜けている。いつまでも安らぐ時を得られない自分の運命——、しかもその運命が大きく変転する時には、不思議と死が隣り合さっている。敗戦時には、降伏を潔しとせず自決した戦友の死、シベリア抑留中は飢えと酷寒と重労働で倒れて行った同胞の死、第二の人生として近畿商事へ入社し、F X戦に巻き込まれ、陸士以来の盟友である防衛庁の川又伊佐雄^{かまたいさお}空将補の、自殺とも、事故死ともつかぬ列車による轢死——、それぞれの死が壹岐の運命の変わり目にべったりと貼りついていくようであった。そして妻で

すら、自分が呼び止めなければ、避けられたであろう無惨な交通事故で死別するという運命を背負っている。壹岐は、鉛色の空に屹立する高層ビルの一つ一つが、死者の巨大な石塔の墓標のように見え、ニューヨークの大都市の中で、果てることのない流浪の旅をしているような心の凍える思いがした。

いたたまれず、壹岐はテレビのスイッチを押した。CB放送が、午前七時半の天気予報を流している。北米大陸の気圧配置図が出た後、

「今日、一月二日のニューヨーク市の天気予報をお知らせします、今日のお天気は一日中、曇、気温はカナダからの寒波が張り出し、午前中は華氏五度乃至六度、昼間は八度近くまで上りそうですが、夕方から夜にかけて、ところによって雪が降るでしょう」

と報じ、あとは煙草のケントのコーナーになった。五月から九月にかけて、よく晴れた日には、一キロ程先のビルの上に取りつけられているケントの広告板に、電光時計と気温の数字が見えるが、曇天続きの冬の朝は、その光さえ見えない。

壹岐は、テレビを消すと、朝食を摂るために、キッチンへ入った。日本では正月休みであったが、十二月二十日過ぎから年末までクリスマスホリデーをとるアメリカ人にとって、新年の一月二日は平常のビジネスがはじまる日であった。

白で統一されたキッチンに並んでいる冷蔵庫の扉を開けると、年末に、日本人メイドのハル江が心をこめて作っておいてくれたおせち料理が半分ほど残っており、雑煮も温めさえすればいいように、タッパーウェアの中に仕分けて入っている。

壹岐は、すまし雑煮と記されたブルーのタッパーウェアを取り出し、餅を入れて煮ると、ガウン姿のまま、ダイニングルームの大きなテーブルに坐り、箸をつけた。メイドのハル江は、敗戦後、日本に進駐して来た黒人下士官と結婚して、渡米し、三人の子供をもうけたが、ベトナム戦争で夫が戦死し、未亡人になった女性であった。両親が横須賀で食堂経営をしていたというだけあって、味付けは美味しかったが、タッパーウェアから取り出して独り食べる雑煮は、日本から届けられた塗のお椀と箸で食べていても、無味乾燥なうそ寒さを覚えた。

食事を終え、食器を流しへ出して、壹岐は広いリビングルームを横切り、書斎へ入った。十五、六畳の書斎に、ベッドを持ち込み、洋服ダンスを並べ、食事以外の一切のことを、この部屋ですますようにしている。

ガウンとパジャマを脱ぎ、下着を着、靴下を履き、スーツに着替え、机の引出しから万年筆、ボールペン、シャーペンシルを取り出しかけ、壹岐は机の上においたままになっっている直子と誠から来た年賀状を、もう一度手にした。直子は和紙の葉書に母親似の優しい字体で、したためてい

る。

明けましておめでとうございます。こちらは、親子揃って元気です。太はこのお正月で一歳二カ月、名前のようにまるまる肥って、年末にお父様から送って頂いたお玩具を、お風呂に入る時まで離しがありません。もっとも顔はますます倫敦似で、彼はご機嫌ですが、

次はお父様似のベビーが授るよう秘かに願っています。

壹岐はふと口もとを綻ばせたが、すぐ微笑が消えた。直子と鮫島倫敦との結婚が、双方の親の反対を押しきったものであったことが、今さらのように思い返された。

直子が東京商事の鮫島辰三の一人息子の倫敦と結婚したいと云ったのは、壹岐のニューヨーク赴任が決まった時であった。妻の死後、直子はジャパン航空の広報課へ勤務する傍ら、家事をきりもりし、壹岐が家政婦を備おうと云っても、「いいのよ、お父さんと二人きりの方が——」と云い、日曜日など洗濯や掃除で甲斐々々しく働いている直子の姿を見ていると、はっと驚くほど妻の佳子に似ていた。

それだけに壹岐にとって、直子が嫁いで行くことは、耐えられない思いであるのに、相手がよりにもよって鮫島辰三の息子とは許し難く、強硬に反対した。しかし、直子の気持は揺がず、娘の伴せのためならと自らに云いきかせ、断

腸の思いで許したのだったが、鮫島の方は、倫敦と直子との結婚には徹頭徹尾、反対で、壹岐をホテルへ呼び出し、「息子と君の娘との結婚を許すくらいなら、親子の縁をきる」と息巻き、鮫島の妻に至っては、「大切な一人息子の花嫁は私が決めるのです、私が！」と人眼もかまわず、半狂乱になって喚いたのだった。それでも息子の倫敦は両親の狂乱など我関せず焉と、挙式の式場、その他の手続きを一人でやつてのけ、その落ち着き払った凶太さは、壹岐の方がいささか不気味に思えるほどであった。倫敦が文案を作った結婚の案内状を受け取った父親の鮫島は、シヨックのあまり、壹岐に電話して来、「今後、何らかの商売で近畿商事と競合する時は、君に譲るから、この結婚だけは取り止めてくれ」と泣きついて来たが、壹岐は「結婚は、ビジネスではない」と断ると、一人息子の結婚式にもかかわらず、花婿の両親である鮫島夫妻は欠席という挙に出たのだった。そして新婚の住いを、たまたまニューヨークへ赴任する壹岐の柿ノ木坂の留守宅にしたことから、鮫島夫妻の怒りはさらにエスカレートし、一切の付き合いを今日まで拒否し通している。

直子からの年賀状をおき、インドネシアから届いた誠からのクリスマスカードを手に取った。金箔と黒でインドネシアの古典的な踊りを印刷したクリスマスカードに、一行、「年末、年始はジャカルタで過します」と書き添えていた。

誠は東北大学を卒業し、五井^{ゴイ}物産に入社して二年目、ニューヨーク駐在の話があったのを、穀物部が行っているインドネシア農業開発のプロジェクトに志願し、赴任したのだった。壹岐にしてみれば、会社こそ違え、誠がニューヨーク駐在になれば一緒に暮せると、心ひそかに楽しみにしていたが、誠はニューヨークなど目もくれず、電灯も水道もない赤道直下のスマトラのジャングルを、現地人と汗まみれになって開発するプロジェクトに飛び込んで行ったのだった。子供の頃はどちらかといえば線が細く、無口で、もの足らぬ奴と思っていた誠が、自分と全く異なる方向で、逞しい商社マンに育って行く姿を、壹岐は頼もしいと思う反面、一抹の淋しさを感じていた。そしてクリスマスホリデイに一度、ニューヨークを見ておくがいい、航空券は送ってやると云ってやったのに、誠は父のもとには来ず、ジャカルタで過すという便りは、壹岐の心をさらにも淋しいものにしたのだった。

机の上の電話が鳴った。受話器を取ると、アパートのロビーにいるコンシェルジュからだった。

「Good morning, Mr. Iki! あなたの車が迎えに参りました」

毎朝八時二十分に迎えに来る運転手が、来たことを報せた。壹岐は九時に出勤して来るメイドのハル江に、今年もよろしくとメモを書き、部屋の鍵をかけ、人影も人声もしない長い廊下を、エレベーターホールへ向って歩いて行っ

た。

アメリカ近畿商事のオフィスは、パークアベニュー三〇番地に聳える九十階建のニュー・パンナム・ビルの中にある。

壹岐は、アタッシュケースを下げ、地下駐車場に降りたつと、もはや家にいた時のような弱りは微塵もなく、研ぎ澄されたような表情で、三十階までノンストップのエレベーターに乗り、45のボタンを押しした。三年前に竣工したばかりのニュー・パンナム・ビルには約五百社のオフィスがあり、日本の企業では七十一、七十二階のツー・フロアを借りきっているアメリカ五井物産を筆頭に、メーカーの出張所のような小さなオフィスまで合せると、十三社入っている。

エレベーターは、三十階まで音もなく静かに上昇して行く。アメリカ人、ドイツ人、中国人などさまざまな人種が乗り合せている。午前八時半前に、三十階以上のオフィスへ出勤する人々は、かなりの会社のビジネスマンたちで、地味だが、仕立のいいカシミアのコートを着、書類の詰ったアタッシュケースを下げ、階数標示板を見詰めている。

壹岐は、四十五階でエレベーターを降り、アメリカ近畿商事の社章の入った大きなガラス扉を開けた。受付には、日本の正月流に松と菊を活けているが、まだ受付嬢の姿は

なく、黒人のガードマンが遠くから「Good morning, sir!」と、挨拶した。

壹岐は人影のない廊下を歩き、つき当りの分厚い扉を押した。とつときにセクレタリーの部屋があり、その向うに社長室がある。実態は近畿商事のニューヨーク支店だが、税法上、現地会社の形態を取っているのだった。

社長室の窓からは、マンハッタンのメインストリートであるパークアベニューの広い通りと、林立する高層ビル、そしてセントラルパークの森が、一望のもとに見はるかされる。

一昨年の春、アメリカ近畿商事の社長として赴任し、はじめこの部屋に足を踏み入れ、窓際にたった時の押しひしがれるような威圧感とともに、小なりとはいへ、アメリカ近畿商事のトップとして、世界的な企業に伍してゆかねばならぬ大きな責任感と、そうしたポストと機会を与えてくれた大門社長に対する感謝の念が、今さらのように壹岐の心に甦つた。

やがて九時五分前、セクレタリーが出勤し、副社長のポストにいる海部要と財務担当の池田元利が、揃って部屋に入ってきた。

「お早うございます、今年こそ、ニューヨークの日本商社ナンバーワンの利益率を狙いたいと思つてますねん」

大阪本社の財務出身の池田は、英語以外は大阪弁で喋り、資金調達のためには、なり振りかまわず、ニューヨークの

金筋を駆けずり廻る行動派であった。業務担当の海部も、「今年こそ、ミサイル級のビッグビジネスを打ち上げたいものですね」

メタルフレームの眼鏡をかけ、人あたりのいいソフトな顔にファイトを燃やすように、云った。壹岐は、二人の顔を見ながら、

「僕の方こそ、君たちの協力がなければ、とても無事にアメリカ近畿商事の社長の仕事は勤まらなかつたよ、今年もよろしく頼む」

言葉の問題からして意のままにならず、会話のレッスンを受け、男鏢の暮しも手伝つて八キロ体重が減るなど、人前では語れぬような苦勞の連続であつたが、トップとしての自分を守りたててくれた社員たちの協力を思うと、感謝の氣持で一杯だつた。特に海部要に対しては、言葉に尽せないものがある。海部は、壹岐が商社マンとして第二の人生を歩きはじめた直後にアメリカへ出張した時、まだ現地法人化していなかつたニューヨーク支店の穀物課員で、柔軟でシャープな頭脳に目をつけ、その後、自分が業務本部をつくるに際して、兵頭信一良、不破秀作とともに海外情報に明るいブレンとしてニューヨークから呼び戻した手前、アメリカ近畿商事社長として赴任するからといって、再度、同行を求めかねた。といつて、兵頭信一良は、壹岐のアメリカでの懐刀として使うには、あまりに杵からはみ出した人物であり、不破秀作は海外経験が乏しいというより、

自分の分身として業務本部に残しておくべき人物であった。そうしたことを考え、壹岐は誰も連れず、単身で赴任することを決心した時、海部は私でよろしければと申し出、壹岐より一カ月早く着任し、下地作りまでしてくれたのだった。

扉をノックし、セクレタリーのスザンヌが入って来た。

「新年のご挨拶を始める時間です、それからアメリカン・バンクのコネリーさんの昼食はスカイ・クラブを予約しておきました、そのあと三時にジェトロの新年会へ行かれる予定になっています」

と伝えた。

壹岐は、海部と池田とともに席をたち、エレベーターホールを隔てて、向い側の営業部へ入って行くと、いつもは、もう取引先に出かけている営業マンたちが顔を揃え、財務、法務、総務などの管理部門のスタッフたちも集っていた。東京本店からの駐在員が八十名、現地採用者百名が、アメリカ近畿商事の全員であった。

壹岐は一同の前にたち、英語でスピーチをはじめた。

「一九七〇年の年が明け、アメリカ近畿商事が新しい年のスタートについた第一日にあたって、皆さんにご挨拶致します。

クリスマスに、ニクソン大統領がテレビ放送で、演説されたのを既に聴かれたと思いますが、ベトナム戦争の長期深刻化に伴い、アメリカは経済的にも、政治、外交、軍事

面においても、苦しい試練にたたされ、アメリカを中心とする自由主義世界にとつても、問題に満ちた時期であります、しかし、どのような変化が起るうとも、われわれはアメリカの底力を信じ、日米相互の繁栄、自由主義国家の発展のために寄与しなければならぬと思います、幸いアメリカ近畿商事は、百八十人の社員の努力により、昨年の三ヶ月期、九月期の決算とも遜色のない利益を生み出し、会社の業績向上に寄与することが出来、皆さんに対して心から感謝の意を表します、今年も国際社会の中で進歩と調和を目ざし、業績の向上を計り、活躍されることを期待します

——

と云いながら、ベトナム戦争で疲弊しているアメリカが、今後どのような経済、政治、外交、軍事上の政策転換を余儀なくされるか、アメリカの力を中心とした自由主義世界の秩序の変化は、アメリカ人社員のいる前であからさまには話せなかったが、もはや絶対といってもいいほど何らかの変化は、避け難い時点まで来ており、それが日米経済をより険悪にして行きそうであった。

挨拶がすむと、力強い拍手が湧いた。壹岐は前列にたっているアメリカ人のマネージャーたちと握手し、社長室へ戻るために、営業部のフロアを出かけると、機械担当の堀四郎が足早に寄つて来、

「やっとフォーク社と正式にコンタクトがとれました、フォーク会長のブレンで海外企画担当のプラット執行副社

長が、壹岐さんに会う意志を表明して来たのです」

日頃、冷静な塙が、息を弾ませるように、小声で云つた。

「壹岐も思わず、眼を輝やかせ、

「八束君に、もう報せたのか」

「はい、先ほど——」

横を通り過ぎて行く社員たちを気にしながら云うと、

「それでは新年早々、すまないが、今夜、七時に僕のアパートへ来てくれ給え」

「承知しました、八束君と伺います」

塙はそう応え、さつと離れて行つた。

壹岐は、心の昂りを抑えかねるように社長室に戻つた。

アメリカ近畿商事の社長として無事最初の一年を過した時、自らに課したのが、千代田自動車の外資提携であつた。国内のメーカーとの提携もうまく運ばず、自主独立路線の道を歩むこともはや不可能になつた千代田自動車を、壹岐はビッグスリーの雄、フォーク社と提携させることを考え、昨年秋、一時帰国した折、千代田自動車の森社長とメインバンクの第三銀行の玉井頭取の委任状を極秘に取りつけたのだった。そのことを近畿商事内で知つてゐるのは、大門社長と業務本部に残している不破秀作であり、アメリカ側では海部と塙、八束の三人だけであつた。

今なお日本政府が民族資本擁護を強く主張している中で、千代田自動車とフォーク社との提携をやつてのけようとす

ることは、至難の業であるが、それが半年間の雌伏期間を経て、遂に動き出そうとしている。壹岐はパノラマのように広がる巨大企業のビルが林立するミッドタウンに挑むような視線を向けた。

ニューパンナム・ビルの九十階にあるスカイ・クラブで、壹岐は、アメリカカン・バンクのコネリー副頭取と、トーマス日本担当部長を招き、昼食をとりながら、快適に話し合つていた。

一カ月に一度、定期的にもつている昼食会で、膨大な資金を喰う商社にとっては、銀行との接触は日本の銀行同様に大切なことであり、金筋筋を通してアメリカの産業界の情報を得ることが出来た。

会員制のクラブであつたから、各テーブルは殆んど一流企業のエグゼクティブのビジネスランチで、人の出入りが少く、給仕たちは客の好みの飲物と料理を心得ていて、落ちついた雰囲気であつた。

パークアベニューを一望のもとに見下せる窓際のテーブルを挟んで、壹岐と海部要、池田元利が坐り、アメリカン・バンクの極東担当頭取のコネリーは、洗練されたハイバード・アクセントで、クリスマスホリデイを家族たちとマイアミで過したことを話し、日本担当部長のトーマスは、筋肉質のスポーツマンのような体軀で、カナダへ狩獵

に出かけ、トナカイ二頭を射止めたことを、大きなゼスチャーで話した。海部と池田は、時折、相槌を打ち、壹岐も静かに微笑んだ。

一しきり、ホリデイの話がはずむと、コネリー副頭取は、壹岐に話しかけた。

「ミスター・イキ、二年目の新年をニューヨークで迎えた感想はいかがですか」

「やっとこちらの生活に馴れましたので、あなた方取引関係のご支援によって、今年はビッグビジネスに取り組みたいと思っています」

静かな意気込みを見せて、応えた。重要なビジネスやこみ入った話の内容の時は、必ず通訳を入れるが、個人レッスンを受け、下手ながらもできるだけ自分で話す努力を積み重ねて来たせいも、日常会話には不自由しなくなった。

コネリー副頭取は、そうした壹岐に好感を持っており、ゆっくりとした語調で、

「それは私たちも大いに望むところで、ベトナム戦争が長引き、国内の労働力が質、量ともに低下し、アメリカ国内企業への投資が狭まっている時期だけに、世界にネットを持つ日本の総合商社の優れたプロジェクトがあれば、われわれはそれに関心を示し、投資することを考えていますよ」

ワインを飲みながら、云った。

「今年の大統領のユニオンメッセージ（年頭教書）は、ど

のような内容のものと考えられますか」

毎年一月下旬、大統領が全米向けのテレビで演説する年頭教書は、アメリカ合衆国を引っばって行くポリシーを打ち出し、それによってその年のアメリカの外交、財政、経済が方向づけられるものであった。

コネリー副頭取は、ナプキンで口もとを拭ってから、

「そうですね、ベトナム休戦は何度も失敗し、物価はこの一年で六パーセントも上がっていますから、インフレ対策に重点がかかり、連邦準備制度理事会は通貨供給量の引き締め政策をどれぐらいやれるかが、注目されるところでです」と話した。海部は、メタルフレームの眼鏡をきらりと光らせ、

「アメリカの国際収支の赤字を打開するために、対日輸入制限というような強行策が打ち出される懸念はないでしょうか」

日本の商社にとって、最も気懸りな点を聞いた。コネリーは、フォークを取り、

「その点では、西独は昨年、マルクの切り上げをし、輸出を実質的に抑えたのに対し、日本は何もしていないから、対日輸入制限、或いは関税引上げが考えられるかもしれないませんが、もっとも、アメリカの莫大な国際収支の赤字は、対日輸入制限などでどうしようもないことです——」

重い口調で云った。街にはベトナム反戦運動が拡がり、

地下鉄の電車の中には“Ship American, Buy American”（ア